

長く関わった2つの仕事

木村 亮

KIMURA Makoto



1982年、年次学術講演会で卒論研究を発表するために、私は土木学会の学生会員になった。以来32年を経たが、長く関わった2つの学会活動を紹介したい。

ひとつは1995年から関わった土木学会誌編集委員会の仕事である。幹事3年のあと委員1年、幹事のいない幹事長を2年、最後は2008年より委員長を2年間勤めた。15年間の間、半分以上の8年間、毎月最低1度は四ツ谷に京都から通った。初めての幹事会に出席したとき、幹事の人たちが関西人の私にとってはどうしても冷たく聞こえる標準語で、理路整然と自論を展開されるのを聞いて、とんでもないところに来てしまったと後悔した。ただ、回を重ねると、理屈はすごいが新しい発想や少し突拍子もない面白い意見は意外と少ない、ということに気づいた。

2年目からは自分の意見を会議の場で述べるようになり、「そんなこと言うのならあなたがやりなさい」と言われ、とにかく恥ずかしくないように頑張った。その努力の集大成が1997年12月号のミニ特集「土木と国際協力」である。すべての記事を企画し、一貫してチェックし、編集し、紙面のデザインまで考えた。今も大切に残している、私の土木学会誌記念号である。「つくり手が楽しんで作らないと受け手は楽しめない」が私の編集スタイルで、委員会をも含め明るい雰囲気の前向きに企画・編集した。「人の顔と人の意見が見える誌面づくり」も終始こだわったポイントであった。

「土木界の将来を担う学生の学会離れをいかにくい止めるか、学会活動を学生会員にとって魅力のあるものにするためには、何が必要なのか」という未だに解決されていない問題が、関西支部創立60周年記念事業の企画段階で議論され、その結果1987年度に生まれたのが「学生会員海外派遣研修制度」である。基本的に一人で研修し、世界の47ヶ国に派遣した。関西支部のユニークな事業として定着したが、2005年度を持って基金がなくなり終了した。

19年間で応募者総数384名、派遣者総数94名（うち女性20名）であった。制度の後半には高専生が多数応募し、ほとんど初めての海外一人旅であった。帰国後の変化は顕著で、自信が生まれ自分の意見を生き生きと発言できるようになっており、若年学生には本当に有意義な制度であった。私は学生時代から世界を自転車で遊学していたことから、事業発足当時の関西支部幹事長であった土岐憲三先生に「君は永久幹事だ」と言われ、私の天職と思ひ、事業の広報活動、面接や書類審査、採択後の研修生へのアドバイス、帰国後の報告会の準備・引率を行った。

「後々まで継続させる事業」で「学会本部が口惜しがするようなこと」をまず関西支部で実行するのだという勢いがあった。私が19年も付き合った、爽やかで労力が苦にならない仕事であった。

(正会員、京都大学大学院工学研究科教授)